連載
映画から
見えてくる
世界
第9回

自爆攻撃にみるパレスチナ

『パラダイス・ナウ』

木下 昌明（映画評論家）

世界はめまぐるしく動いているから、映画批評をしていると話題にこと欠かない。この時評欄でも、台湾原住民の反靖国運動から昭和天皇、アフリカ、旧東ドイツ、君が代や裁判のシステム問題など、その時々の映画のテーマにふれながら問題を追究してきた。それらはいずれも今日の時代のあり方と深くかかわっているものばかりである。

今回取り上げるのはパレスチナ問題で、映画はハニ・アブ・アサド脚本・監督の『パラダイス・ナウ』。監督も俳優もみなパレスチナ人であるが、プロデューサーの一人にイスラエル人のアミル・ヘレルが参加し、仏・独・蘭・パレスチナの合作となっている。それでもパレスチナ映画といっていい。それも珍しい劇映画である。舞台となるのは、イスラエル占領地のヨルダン川西岸のパレスチナ自治区ナブルス。その町で、時には「銃撃戦が終わるのを待って、撮影を続けた」とパンフレットで監督は語っているように、現実がドラマの現場と重なっている。

パレスチナ問題といえば、第二次大戦にまでさかのぼる。ナチスドイツによるユダヤ人の大量虐殺が引き金になって、ユダヤ人は戦後の一九四八年、イギリスとアメリカの後押しでパレスチナの地にイスラエル国

家を樹立した。その際、元から住んでいたパレスチナ人の土地を奪い、かれらを難民とした。その後もイスラエルは領土拡大をはかり、パレスチナ人を迫害し、非道の限りをつくしたが、大国アメリカの支援で国際的に傍観されてきた。そんななか、イスラエルの大量兵器による爆撃やトラクターによる破壊に対抗する手段としてパレスチナの武装勢力は、自爆攻撃などで抵抗してきた。かれらは「アラーの神」名のもとに少ない爆薬で最大限に破壊し、恐怖させるために身体に装着して、イスラエルのバスや人々が集中する建物の中で身をもって爆発させる。

映画『パラダイス・ナウ』は、この自爆攻撃を正面から取りあげて描いた問題作だ。つまり、武装「組織」から自爆攻撃を命じられた二人の青年が、「これは正しいことなのか」と悩み、逡巡し、葛藤し、自らを行動へとかりたてていくものである。

この映画は、初めから終わりまで一切音楽を使わず、さまざまな現実音のみで、切迫した人物の行動と状況を表していく。それがかえって画面のはりつめた流れにドラマチックな効果をもたらしている。また、観客は、背景音楽がないことで、主人公の生き方に同調・同化されることなく事態を見守ることもできる。それによって、そこでくり広げられている日常が、すでに非日常化した現実であることを思い知らされる。

このことは、若い女性スーハが、検問所を通ってナブルスへ入っていくトップシーンからうかがえる。そこで、彼女はイスラエル兵の検査を受けるのだが、兵士は彼女のボストンバッグを調べ、通行証をみる。それも互いににらみ合ったままで。兵士は通行証を戻そうとして、からかうように一瞬その手を引っ込めるが、その顔に笑みはない。このちょっとした身振りにさえ占領者と被占領者との立場の相違をみてとることができる。そしてこの検問所は、日常から非日常的日常に入っていく唯一の通り道である。映画はこれ以降も、町外れの道路には、イスラエル兵が立って封鎖し、道路でない場所は高いフェンスを張りめぐらせている。別のシーンで「ここは牢獄だ」というセリフが出てくるが、それにもうなずけよう。占領下では、このように被占領者が囲いの中で囚人のように暮らすことでもある。

つぎのシーンでは、小さな自動車修理工場が出てくる。そこで主人公となるサイードと友人のハーレドという二人の青年がアルバイトで働いている。折しも一人の客が、車のバンパーが曲がっているとサイードに文句をつけて「お前のおやじのようだ」とどなる。ここでの口論は、うっかりすると見すごしかねないが、これはドラマの重要な伏線で、客は、サイードの亡き父を問題にし、かれ

を侮辱しているのである。それが後に自爆攻撃に向かうサイードの行動の引き金になっている。その二人の間にハーレドが割って入り、客の車のバンパーをハンマーで叩き落とす。短気なかれはサイードが侮辱されるのががまんできなかったのだ。そのために工場をクビになる。

このあとのシーンは、二人が小高い山の斜面に座って水タバコを吸っている。そこからは、反対斜面の谷へとなだれるように密集している住宅街が見おろせる。このシーンの光景は、映画のラスト近く、二人がハイウェーからながめるイスラエルの首都テルアビブの高層ビルのシーンと対照的である。そこに占領する富める側と占領される貧しい側の対比がみられる。

ドラマはこういうなかで進行していくが、ハーレドの失業をきっかけに、二人は「組織」の幹部から、殺された指導者の報復をするので、明日、自爆攻撃をしろと命じられる。

この「組織」は、現実にある組織のファタハ系かハマス系か判然とさせていない。映画はあえてこのあたりはぼかしている。翌日、二人は遺言用のビデオを撮り、髪を切り、髭をそってアラーに祈りを捧げ、最後の食事をして、爆薬を体に縛りつけるといったシーンが出てくる。そのなかで、遺言のビデオは原稿を棒読みしたり、ビデオが故障して中断し、緊張がとぎれたり、撮影中に幹部がパンを食べながら見物していてシラケたり、といった具合に、これから二人の人間が死ににいくのにすこしの緊張感もない幹部たちの態度を批判的に表してみせる。そこから、自爆攻撃をよしとしていない監督の姿勢もうかがえた。ついでにいえば、殉教者の遺言ビデオやイスラエルに内通した密告者が処刑される前に告白したビデオが商店でレンタルされているシーンも出てくる。これには驚いたが、おそらくそこでもパレスチナ社会の退廃的側面を表そうとしているのだろう、とわたしはみた。

ともあれ、自爆攻撃を引きうけたサイードは、眠れぬ夜をすごすことができず、昼間、修理工場で会って、互いに好意を抱いたスーハの家を訪ねる。そこで彼女の父が町の人々から英雄とたたえられている殉教者だと知る。スーハは、フランス生まれのモロッコ育ちということもあって、パレスチナ人の「暴力には暴力を」の風潮を受けいれることができない。父に対しても誇りに思うよりも失った悲しみのほうが大きい。だから彼女は「人殺しに犠牲者も占領者も違いはない」という考えで、もっとモラルの高い抵抗を求めている非暴力主義者である。

これに対して二人の青年の考えは違う。ハーレドの場合、父はインティファーダ（民衆の一斉蜂起）のとき

に捕らわれ、イスラエル兵に「どっちの足が大事か」といわれ、片足を奪われ、おめおめ生き残っている。それがハーレドには許しがたく、自らは自爆攻撃に志願している。

サイードの場合は、もっと屈折している。かれの父は家族を守るためにイスラエルの密告者となり、それが発覚して「組織」によって処刑されたからだ。修理工場で客が「お前のおやじ」云々といったセリフの意味もこれでわかるが、かれは父によって、イスラエル人のみならずパレスチナ人からも否定される生き方をしいられ、自分に、人間としての尊厳をもつことができないでいる。そんなかれにとっての唯一の道は、自らを「殉教者」に仕立てることであった。――ここに自爆攻撃を単純に否定できない複雑な問題が横たわっている。映画は、この三人三様の父の生き死ににかかわる傷痕を描き出すことで、そこには個人の主張をこえた長い占領下での歴史の重さがあることを訴えている。それと同時に、それぞれの立場の違いとその対立もきちんと描いていて、興味深い展開になっている。特に、車の中でスーハとハーレドが対立するシーンは圧巻だ。二人の口論のなかに自爆派と反対派の考えが集約されて吐露されているからだ。そのなかにパレスチナの困難な状況も見えてきて胸がしめつけられる。

確かにわたしも、パレスチナ出身の知識人エドワード・W・サイードと同じく「何度でも言うが、こういう（自爆）行為は道徳的に許せないし、政治的にはどこから見ても自殺行為だ」（『戦争とプロパガンダ4』「緊急課題」みすず書房）という見解に立つ。しかし、映画のサイードのように、その人生を二重に否定され、屈辱のなかでしか生きてこれなかった者にとって非暴力的な解決法をしめしても容易に理解できるものではない。それは父と同じ「卑怯者」の逃避のための詭弁としかみえないからだ。そこでサイードのように「それはだれかがやってくれ」ということになる。このような若者は決して少なくないはずだ。

サイードは、一度めの自爆攻撃に失敗する。それはハーレドとはぐれたからだけではない。いざ自爆のためにバスに乗ろうとして、幼い子どもの姿をみかけて躊躇したからだ。それでもなお、二度めも出かけようと、その決意を指導者に告白するシーンがある。このシーンもいい。なかでも、わたしの印象に残ったのは「イスラエル人は、自分たちを被害者だと確信している。占領者が被害者だなんて。彼らが加害者と被害者の役を同時に演じているなら、僕らもそうするしかない」というセリフ。これも見すごしかねないが、観客への重要な問いかけになっている。

わたしはかつて、ＮＨＫのドキュ

メンタリーだったと思うが、イスラエル市民を内部からとらえたものをみて、あるシーンで衝撃をうけたことがある。それは一人の市民が、長年迫害されつづけた外国での恐怖を語っていたところ。それは本人がそういう体験をしたというのではなく、イスラエルを建国した父の世代の話を受けとめてのことだった。だからユダヤ人国家を守ることが最大の使命――これが精神の核になっている。それによって、かれらはつねに外からの脅威に対して「被害者」として自分を位置づけ、過剰防衛をすることとなる。それは防衛という名の侵略であるが、かれらの意識は、あくまでも「防衛」でしかない。つまり、かれらは被害者意識をもって加害者としてふるまっているから、その侵略攻撃はいっそう異常なもの・病的なものとならざるをえない。そういうかれらの内面がわかって愕然としたことがある。もちろん、これはイスラエルに住むすべてのユダヤ人にあてはまるものではない。いま同じく岩波ホールで公開されているラデュ・ミヘイレアニ監督のイスラエルの映画『約束の旅路』をみるといい。そこではさまざまなユダヤ人――白人から黒人まで、ユダヤ人ならざるニセのユダヤ人までもが生活していて、その上に戦争反対のデモにまで大勢参加していて、決して一様ではない。しかし、イスラエルの支配者は、その「被害者意識」を利用して領土拡張をはかっているのも歴史的事実である。

では、どうすればいいのか？　答えなど見つかりはしない。この映画ではラスト、テルアビブでバスに乗ったサイードの顔を大写しにして、「これは正しいことなのか」と暗に問うている。

日本のわたしたちも遠い他国のことと黙過せずに、ぜひ見て考えてほしい。これはそういう一本である。

追記　この映画は二年前に製作された。その後のナブルスについて、少しも変わっていない状況が『毎日新聞』三月三日夕刊にのっている。「パレスチナ侵攻　イスラエル兵士」「市民を盾に利用か」という見出しで、兵士が「武装勢力」を捜索するのに七歳の少女らを盾にして先導させたというもの。

「イスラエル軍は、二月二五日未明にナブルスに侵攻、旧市街を中心にパレスチナ市民に外出しないよう警告し、パレスチナ解放機構主流派ファタハ系の武装組織アルアクサ殉教者団のメンバーら八人の拘束作戦を一日まで継続した。アルシャイフ・ナブルス県知事によると、市民一人が死亡、約五〇人が負傷したほか、住宅約三〇棟が損壊した」云々。

このように映画の世界はいまも進行中である。

●恵比寿ガーデンプレス内　東京写真美術館ホールで公開中。